

## 第6節「機械によって駆逐される労働者に対する補償説」

【補償説】；“労働者を駆逐する機械設備はすべて、駆逐された数と同じ数の労働者を働かせるに十分な資本を遊離する”

←【反論】2つの論点：機械導入による「労働者の遊離」と「生活手段の遊離」（原ページ(以下同様)464末～)

### A. 機械導入による「労働者の遊離」(461～)

資本の投下額 【旧】  $6000 = 3000(\text{可変資本}) + 3000(\text{不変流動資本})$

①機械への投下資本量が代替する可変資本と同じ場合、

$$\text{【新①】 } 6000 = 1500(\text{機械}) + 1500(\text{可変資本}) + 3000(\text{不変流動資本}) \quad (462)$$

→これは直接に雇用労働者を減少させる。

②機械への投下額が代替する可変資本より小さければ(ここでは機械が1000)、500が余るが、これも投下すれば合計で、

$$\text{【新②】 } 6000 = [1090 + 10/11](\text{機械}) + [1636 + 4/11](\text{可変資本}) + [3272 + 8/11](\text{不変流動資本}) \quad (462)$$

→これも雇用労働者を減少させる。

③機械(1500)の製造に従事する労働者を考えると、 $1500(\text{機械}) = c + v + m$  となり、 $1500 > v$  で、 $1500 + v < 3000$  なのでやはり雇用は減少する

★そのうえ、「機械は一度できあがれば死ぬまで更新される必要がない(462)」ため、機械工が「遊離」されないために生産を続けられ、その機械が代替する労働は遊離され続けることになる。(←※ここでの機械の評価)

### B. 機械導入による「生活手段の遊離」(462～)

しかし、「補償説」の主張は上記の「労働者の遊離」に関するものではなく、機械導入は労働者の遊離をもたらす、それは「生活手段の遊離」をもたらすことである。つまり「補償説」の主張は“遊離された生活手段は雇用に使われる＝「補償」される”(462-463)ということになる。

←【反論】 機械導入による「労働者の遊離」によって生活手段の需要が減少すれば、生活手段も資本の生産物としての商品なので、生活手段生産部門の労働者が「遊離」する(463)。つまり機械を採用しなかった部門でも雇用が減少する。

もし新しい雇用が生じるとしてもそれは新規の資本の投資であって、雇用を削減した資本によるものではない。

また、遊離した労働者はそれまでの労働に適合しているので新しい雇用には不向き(464)(←※この議論は本筋か?)

### ■ 労働者の遊離に対する機械の役割(464末～)

労働者の遊離は機械それ自体に責任があるのではなく、資本主義的充用が原因。機械それ自体は労働を軽減するが、資本主義的に充用されると労働を過重にする(465)。

←【ブルジョア経済学者が反論】“それは外観であって機械そのものを問題にするのはおかしい”

### ■ 機械が直接には雇用を削減しながらも他の面で雇用を増加させる場合(466～)

【絶対的な法則】採用された機械による生産物量が以前と同じなら(労働手段生産のための労働量を含めても)雇用量は減少する。しかし実際には生産物量は増大するので総雇用量は増大しうる。

1 機械導入による生産増加の効果(466-468)

[機械導入→生産増加→生産手段需要増大]となるが、労働需要がどの程度増加(減少)するかは以下の点による。

④追加的な生産増加に対して、不変資本成分と可変資本成分がどのような比率で変化するか。

⑤さらにその追加的な生産増加において、機械がどの程度導入されるか。

⑥間接的波及効果。(※比較生産費説に似ている。例：羊毛需要増加による農業労働者の減少。これに対して綿花栽培のための労働需要増加は④にあたると思われる)

②奢侈産業など新しい消費・生産部門の増大による労働需要増加の可能性

(※スミス(・リカード)と同じ視点(リカード岩波文庫訳本下 283-284))

③新しいタイプの巨大な生産手段建造が労働需要を増加させる(469)

機械の導入が一定の段階に達すると初めて生じるもの。運河、ドック、橋。さらにガス、電信、写真、汽船、鉄道など。ただし総生産に占める比率は小さい。

④不生産的部門での労働需要増加(469-470) 僕卑階級など

## 第7節 機械経営の発展に伴う労働者の輩出と吸引 綿業恐慌

(1)【一般的見解】機械は導入期を過ぎれば賃金労働者を増加させる(471)

(2)【譲歩】工場部門の拡大は充用労働者の相対的(絶対的にも)減少を引き起こすことがある(471 末、※訳文に問題?)。

(3)【一般的見解の再論】機械によって労働者が駆逐されても工場数や規模の拡大によって工場労働者が、駆逐された手工業やマニュファクチュア労働者数よりも多くなることもある(473)。

(4)【現実】機械導入による労働者の代替という過程(改良)は非連続的。与えられた技術的基礎の上での単に量的な拡張、という中断が入る(473)。(※資本蓄積の二様式)

(5)【まだ理論的ではないが純粹に事実的な関係】機械が新しく導入されることによる特別な利益→機械利用の拡大→機械の広範な普及によって機械による一般的生产条件が確立すれば→原料と販売市場のみが制限となる自己運動的な拡大能力を持つようになる→この制限を克服するために国際的分業と農業における諸変革がもたらされる(474-475)。(※「理論的叙述そのものがまだ到達していない」の意味は?)

### ■ 産業循環について

繁栄期以外の激しい競争に焦点を当てている。そこでは、労働力に取って代わる改良された機械や新たな生産方法の導入、労賃の価値以下への切り下げが行われる(476)。

労働者数の増加率は、工場に投じられる総資本額の増加率よりも低いが、両者の増加は産業循環の好況・不況期の交代を通じて起きる(477)。労働者を駆逐する技術的進歩と、労働者を吸収する諸工場の単に量的な拡張 (※資本蓄積の二様式) (※以下 477 半ばからは省略)

### 疑問・議論

◎462 「機械は一度できあがれば死ぬまで更新される必要がない」これは文字通りに解釈できるか?

◎471 末、※訳文に問題 第7節の第2段落の冒頭で国民文庫版と岩波文庫版は「しかも」で始まっているが、他の訳本では「確かに」または「なるほど」で始まる。原書では第2段落冒頭が *Zwar* (*Werke* 版 S.471 の 12 行目)で、それは第4段落初めころにある *jedoch* (同 S.473 の 3 行目)と対になって後者が強調されている。したがって両文庫版は誤訳であるが、問題なのはその誤訳を導いた理由で、おそらく訳者は「機械によって雇用が減少する」ということを強調したかったからであろう。しかし本文は機械による雇用減少を説く第2、3段落を譲歩部分として、実際の強調部分は第4段落での資本主義的な賃労働の増大であると思われる。しかしそうするとこの第4段落末尾での労働者数減少の評価が問題になる(後掲の疑問①の②と関連)。

⑤474「理論的叙述そのものがまだ到達していない」の「まだ」の意味は？

#### ㊦「補償説」に対する評価

「補償説」を批判しているのであろうが、どのように批判しているのか？

①【予定調和性の批判】補償説を“機械の採用による労働(生活手段)の遊離は、予定調和的に新しい雇用を生じる”と解釈するなら本文での批判はもっともである。ただし議論がここにとどまるとは思えない。

②【雇用減少＝窮乏化論】労働需要の削減の方にアクセントがあるようにも見える。そうであれば後の蓄積論における「窮乏化」論と整合的で、伏線になっているとも言える。特に7節で労働者の数を数えて減少していることを指摘している箇所(473末-474)、また労働者の多くの部分が僕卑階級など不生産的労働に移ることを指摘している箇所(469-470)にそれはうかがえる。しかし資本の有機的構成の高度化は資本に対する賃金労働者の相対的減少であるが、賃金労働者の絶対的減少を意味するものではない。

③【技能低下・賃金低下】分業のために特殊化された労働者には低賃金労働しかない(464)、という批判は本筋とは思えない。資本は従来の職人的な技術を解体して再編成するのは一般的な傾向だろうから。ただし、疎外論の観点からすれば、資本の有機的構成の高度化とは“労働者は自らの労働によって自分に対して疎遠で敵対的な資本を増やし続けている”ということであるとして、資本主義批判をしているとも言える。ただしこれも本筋ではないだろう。

④【機械採用の断続性】窮乏化論と異なり、第7節の表題を文字通りに解釈すれば“景気循環の局面に応じて機械の採用(資本の有機的構成の高度化)が断続的に行われ労働力を排出・吸引する”として宇野の景気循環論と整合的に見ることもできる。

#### ㊧「補償説」批判におけるリカードとの差異

①リカードの見解「労働者階級は、機械の使用がしばしば彼らに不利であるという意見を抱いているが、この意見は、偏見や誤りにもとづくものではなく、経済学の正しい原理に合致するものである」(訳本下p289)

②リカードに対する評価(462注213)

③資本の増加に対して「せいぜいのところ、労働需要は逡減率でしか増加しないだろう(訳本294)」(the most that can be said is, that the demand will be in a diminishing ratio)としている。これは資本の有機的構成の高度化と言ってしまってもできる。

#### ㊨分析の単位時間(または周波数)の長短による違い

【短期的】需要の増大などの外的変化が生じたときに、資本構成・技術条件など蓄積条件を一定の外的な与件として、資本がどのように反応し、また雇用量などがどのように変化するか、という分析方法(466-467など)

【中期的】かつては外的与件であった蓄積条件自体を自己産出する仕方。つまり、機械経営の質的変化と単なる量的拡大の交代(474)が蓄積条件を生み出す→景気循環(473、477第2文以降など)

【長期的】資本が繰り返し行う蓄積条件自体の自己産出運動の継続がどのような傾向を生じるか→「利潤率の傾向的低下の法則」のようなもの。ここでは、資本の増加に対して相対的に逡減率での労働需要の増加、のようなもの。(477第1文など)